

研究主題 「インクルーシブ教育」

～ありのままの他人を認める道德教育の実践～

埼玉県立松伏高等学校

1 研究主題の設定理由

今年度から、本校校舎内に特別支援学校の分校が設置された。本校生徒は、特別支援学校分校の生徒と同じ校舎内で学校生活を送っており、今までには生じなかったエクスクルーシブ(排他的)な問題が発生することが懸念される。そのため、昨年度は共生に向けた準備として、障害者理解や多様な価値観に触れることを目的に研究を行った。今年度は分校生徒との交流で、障害の有無を「壁」と感じることなく、共生することを目指してこの主題を設定した。その中で、ありのままの他者を認め合う力を育み、より良い学校生活、集団生活の充実を目指す。

2 研究の仮説

「MSP 松伏スーパープレゼンテーション」並びに様々な学校行事での、分校生徒との交流により、

- ・ 他者の価値観やものの見え方が、自分と同じではないことを自覚し、他者を尊重する生徒が増えるのではないかな？
- ・ 障害に対する理解が深まり、お互いがより善く生活するための行動を意識することができるのではないかな？

3 研究の経過

10月14日(木) 在り方生き方教育講座 (2学年)

【講師：鳥居徹也氏(夏見台幼稚園・保育園園主)】

10月22日(金) 分校生徒による、本校授業参加 (1学年)

29日(金) " (")

11月2日(火) 本校生徒による、分校授業参加 (生徒会)

12月14日(火) 放課後交流行事(クリスマスツリー設置) (生徒会)

21日(火) 夢と豊かな心を育む講演会(道德教育講演会) (全学年)

【講師：松元卓巳氏(あいおいニッセイ同和損保)】

MSP 松伏スーパープレゼンテーション (全学年)

22日(水) 障害者理解学習(アクティブラーニング) (1学年)

通年で実施 分校生徒による、本校学校行事参加 (全学年)

通年で実施 分校生徒によるパン販売 (全学年)

4 研究の内容

(1) 10月14日(木) 在り方生き方教育講座(2学年)

夏見台幼稚園・保育園園主の鳥居徹也氏を招き、講演会を行った。心理学の知識を交えた内容で、自己肯定感を高めるためのヒントが多く詰まっていた。今後の学校生活に向けて、希望と勇気を頂くことができた。

(2) 10月22日(金)、29日(金) 分校生徒による、本校授業参加(1学年)

1学年の書道の授業に、分校の1年生が2週間に分けて参加した。「行書とは何か」という問いに対して、各自が積極的に筆を握った。礼儀を重んじながら、他者の作品と自己の作品を比較してお互いを高めあう様子が見られた。

(3) 11月2日(火) 本校生徒による、分校授業参加(生徒会)

生徒会本部役員が、分校の「職業」という授業に参加した。「農園芸」と「ビルメンテナンス」の2班に分かれて体験をした。「農園芸」では、本校敷地内にある畑で、大根を収穫した。「ビルメンテナンス」では廊下を、機材を用いて清掃した。最初は緊張からか会話が弾まなかったが、手を動かし続けるうちに会話も増え、相互理解、寛容の精神が育まれた。

(4) 12月14日(火) 放課後交流行事(クリスマスツリー設置) (生徒会)

生徒会からの発案で、各校の昇降口にクリスマスツリーを設置する行事を分校に提案したところ、快く引き受けていただき、実施に至った。本校の生徒会本部役員と有志で集まった分校生徒8人で、4本のクリスマスツリーを設置・装飾した。分け隔てない会話が生まれ、校種や学年の壁を超えた友情を得ることができた。分校生徒から「もっと交流をしたい」との声も上がった。



(5) 12月21日(火) 夢と豊かな心を育む講演会(道徳教育講演会)(全学年)

デフサッカー日本代表の松元卓巳氏(あいおいニッセイ同和損保)を招いた。テーマは「デフサッカーから得たもの～スポーツを通じた心のバリアフリー～」。

講師は聴覚障害があり、マスク越しの会話が困難であること等、障害への理解やパラスポーツの魅力について語っていただいた。障害を「自分らしさ」と説き、「人間誰しも得意・不得意がある。私はたまたま耳が聞こえないだけであり、それをネガティブに捉えてはいない。できることを頑張り続ける。」という発言から、多くの生徒が前向きに生きるための希望と勇気をいただいた。

(6) 12月21日(火) MSP 松伏スーパープレゼンテーション(全学年)

10年目の節目となる本校名物行事である。立候補した9組18名の生徒・教員が、興味関心のあることについてプレゼンテーションを行った。内容は歌、ダンスから、趣味(ゲーム・アニメ)や手帳活用法まで多岐に渡った。どれもが「伝えたい」という熱意が十分に伝わる発表だった。発表を聞いた生徒は終了後、発表者に

向けてメッセージを送った。様々な視点から魅力に気づいて記入しており、他者を受容し理解する姿勢を感じとることができた。

(7) 12月22日(水) 障害者理解学習(アクティブラーニング) (1学年)

1時間目は、昨年度作成した絵本「みえるとか みえないとか」(ヨシタケシンスケ著、アリス館)のアニメーション動画の視聴とディスカッションを行った。2時間目は、知識構成型ジグソー法を活用してさらに学びを深めた。エキスパート活動をA障害に関するPC学習、B知的障害の体験活動、C過去の学びの振り返りとして、各班で学んだ内容をジグソー活動で共有し、最後には分校生と学校生活を送る上での「心がけ」を考えた。より良い学校生活とは何か、を考えるための架け橋となる授業となった。



(6)



(7)



(8)②



(8)③



(9)

(8) 通年で実施 分校生徒による、本校学校行事参加(全学年)

① 新入生歓迎会

本校の新入生歓迎会に分校生徒との対面の場を設けた。本校1年生代表者とともに、分校生徒の代表者からも代表の挨拶をしていただいた。

② 体育祭

共同で体育祭を行った。分校生徒は、クラス対抗リレーや障害物競走、大縄跳びに参加した。初めて本校生徒と分校生徒が直接交流するため、不安もあったが、係の生徒が思いやりのある行動をとるなど、校種関係なく競り合い、問題が一切起きずに盛り上がり終えることができた。

③ 松華祭(文化祭)

共同で文化祭を行った。「みんな友達大作戦」と題して、全生徒が色画用紙で「幸せを感じる瞬間」を記入した花を作成し、各クラスに配布された模造紙に貼り付けた。それを持ち寄り並べることで全校生徒の花畑を完成させた。想像以上に華やかなものとなり、本校生徒と分校生徒の友情を強固なものとするきっかけとなった。他にも、Google Meetを活用した「ビンゴ大会」の実施や、分校生徒が授業で作成した作品やレポートを見学することで、分校生徒との距離が一層縮まる1日となった。

(9) 通年で実施 分校生徒によるパン販売(全学年)

分校生徒が「職業」の授業で製造しているパンを、昼休みに販売していただき、毎回本校生徒で長蛇の列となる。交流も生まれ、今では昼休みに本校生徒と分校生徒が学年を超えて廊下で交流するなど、より良い学校生活を醸成する上で欠かせない時間となっている。

5 研究の成果と課題

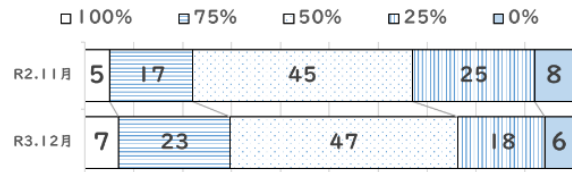
(1) 成果 1 : アンケートより

昨年度実施した「他者理解・障害者理解に関する調査」を2学期末に実施した。昨年度の調査と比較しても、自己受容、他者受容ができる生徒の割合がともに良化した。また、特別支援学校に対する認識度も良化している。

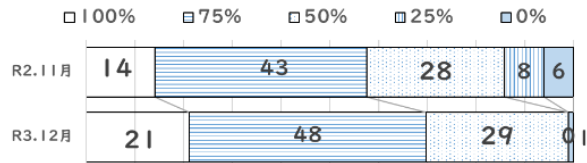
(2) 成果 2 : 感想抜粋

下に行事の感想と、分校の生徒との交流を全校生徒が振り返った感想や来年度取り組みたいことを抜粋した。分校の設置が本校の生徒にとって良い影響をもたらしてくれていることが確認できる。

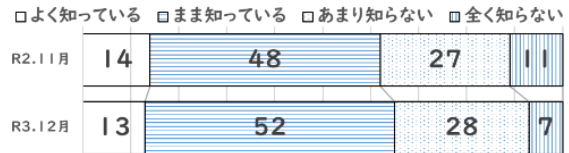
自分の価値観や考えが周りや違うとき、あなたはどの程度、自信を持てますか?(%)



友達や自分の価値観や考えが違ったりするとき、友達をどの程度、受け入れられますか?(%)



特別支援学校とはどのような学校かを知っていますか?(%)



1月21日 夢と豊かな心をはぐくむ講演会(道徳教育講演会) 生徒感想抜粋	
聴覚障害の方の話聞いて、私が日本に来て日本語を理解するのが難しかった頃と似ていると思いました。「障害は個性」という言葉が素敵でした。	
聴覚障害者の苦勞について、初めて考えさせられた。情報の伝達が遅くなるため、震災等の避難時には、積極的に支えたいと感じた。	
障害に偏見を持つ人も少なくないと思いますが、お互いを認め合うことも大切だと実感しました。障害者が過ごしやすい社会になってほしい。	
知らないことが沢山あり、知っていることだけが当たり前だと思わないようにしたい。当たり前ではないからこそ色々な気配りができるようになりたい。	
聴覚障害にもたくさん種類があり、一人一人同じ人がいないんだなと思いました。これを機に、手話の勉強をスタートしたいです。	
障害といっても個性であり、それはみんなと同じで、できないことがあれば皆に頼って互いに支え合って生きていけば良いのだと学びました。	
中学時、友人に補聴器をつけている子がいました。私は理解しているようで、全く理解していなかったことが今日の講演で分かりました。	
今までは、補聴器によって、困ることなどはなかったのだと思っていました。手話や難聴のことを勉強して、もっと深く知りたいと思いました。	
今年度の分校生徒の交流に対する本校生徒の振り返りと、今後行いたいこと	
初めて交流するときは、緊張した硬い雰囲気だったが、交流しているうちに、分校のみんなが、私たちと同じ普通の高校生であることを実感することができた。	
関わりを持つ前は、どう接したらいいかわからなかったが、交流をするうちに、普通になじむことができた。今ではクラスに遊びに来てくれるようにもなりました。	
本校と分校が互いに理解を深め、学校や障害の壁を越えての友人関係を作りたい。同じ高校生として、積極的に関わられたら、お互いに嬉しいと思います。	
交流をすると、「分校にも遊びに来てください!」と誘ってくれたのが嬉しかったです。実際に行くことで5人で楽しくカードゲームをすることができました。	
今後は、例年通りの文化祭ができるようになったら、作っている野菜を利用した料理を販売していただいたら盛り上がりそうだなと思った。	
何かに対して一緒に取り組む時間だけではなく、純粋に話をする機会をもっともっと作りたい。	
分校生がどのような授業を受けているのかももっと知りたい。行事をもっと一緒に行き、交流を増やしたい。	
部活動を通じた交流や、参加希望者を募ってのレクリエーションも行ってみたい。	

(3) 課題

今年度は全校行事や生徒会本部役員による交流がほとんどで、個別に交流を深める機会は多くなかった。しかし、生徒一人ひとりの考え方に「障害の有無に関わらず、誰もが同じ対等な高校生である」ことが浸透すれば、自ずと個別の交流が始まり、規律ある態度が育まれると考える。また、それを促進させるためにも教員同士のコミュニケーションも不可欠である。生徒だけでなく、学校全体として交流をすることで、今年度は生じなかった生徒間のトラブル等にも建設的に対応できるような準備をしたい。モデル校としての任期が終了しても、本校生徒と分校生徒の関係性がより良くなるように、学校全体で環境をデザインできる取組を続けていく。